

有間皇子自傷歌群の示すもの

——挽歌冒頭歌とされた意味——

池田 枝実子

一 はじめに

『万葉集』卷二挽歌の冒頭には、有間皇子の自傷歌二首が置かれている。そして、自傷歌二首の後には、意吉麻呂等の歌や左注などの記載が続く。次に、その全文を掲げる。

有間皇子の自ら傷みて松が枝を結べる歌二首

磐代の浜松が枝を引き結び真幸くあらばまた還り見む

(2・一四一)

家にあれば筥に盛る飯を草枕旅にしあれば椎の葉に盛る

(2・一四二)

長忌寸意吉麿の結び松を見て哀しび咽べる歌二首

磐代の岸の松が枝結びけむ人は帰りてまた見けむかも

(2・一四三)

磐代の野中に立てる結び松情も解けず古思ほゆ いま
だ詳らかならず (2・一四四)

山上臣徳良の追ひて和へたる歌一首

天翔りあり通ひつつ見らめども人こそ知らね松は知る
らむ (2・一四五)

右の件の歌どもは、柩を挽く時作る所にあらずといへども、

歌の意を准擬ふ。故以に挽歌の類に載す。

大宝元年辛丑、紀伊国に幸しし時に結び松を見たる歌一首

(柿本朝臣人麿歌集の中に出づ)

後見むと君が結べる磐代の子松がうれをまた見けむかも

(2・一四六)

卷一雜歌冒頭に雄略御製が、卷二相聞冒頭に仁徳皇后磐姫歌がそれぞれ据えられたのは、各巻の編者の特別な意図によるものであることが従来の研究で明らかにされているが、

卷二挽歌冒頭に有間皇子自傷歌がこのような在り方で置かれたことにも卷二編者の何らかの意図が働いていると見てよいだろう。そこで、この自傷歌二首とその後が続く関係歌群（以下、これらをまとめて有間皇子自傷歌群と呼ぶ）をもとに卷二編者の意図を探り、卷二挽歌冒頭に有間皇子自傷歌が載ることの意味を考察していくことにしたい。

二 冒頭歌の問題

卷の冒頭歌の問題は、契沖『万葉代匠記』が『万葉集』一番歌の問題として雄略御製の意義を説いて以来、卷一・卷二両巻の巻頭歌と鎮魂歌集との関連で、または、三大部立ての冒頭歌と鎮魂歌集との関連で説かれてきたが、巻頭歌とそれ以下の歌とを統一的に説こうとする伊藤博氏によって、歌集編纂に於ける編者の意識の問題に引き上げられ、体系的に考察されることとなった。以後、卷の冒頭歌の論は展開を見せていくが、そこで問題とされたのは二つの点に關してである。ひとつは、何故雄略や磐姫が卷一・卷二巻頭歌の作者たり得たかという点であり、もうひとつは、卷の冒頭にこれらの歌を載せることにどのような意味が託されていたのかという点である。伊藤氏の論はこの二つの問題に答えを出しているが、考察の中心となったのは前者の問題に結び付く作者の人間像の把握であった。氏は、契

沖や折口信夫氏の考え方を基本的には踏襲しつつ、『万葉集』全体の構造を見通して、雄略・磐姫を「古」を代表する天皇・皇后と定義づけた。その後、この問題は、三谷栄一氏・桜井満氏によっても論じられている。また、後者の問題、卷の冒頭歌にどのような意味が託されていたのかということについては、伊藤氏が「巻頭言の意味合いによって（雄略御製）」「すぐれた規範として（磐姫歌）」冒頭に「飾る」ことで「現代宮廷歌集」の威容を整えようとする意図が働いていたと説かれて以来、「規範」を以て卷の冒頭を「飾る」という考え方が受け継がれることとなった。

一方、卷二挽歌冒頭の有間皇子自傷歌については、従来、何故有間皇子が選ばれたのかという作者の問題よりも、皇子の自傷歌が挽歌冒頭に置かれたことの意味を中心に考察されてきた。それは、有間皇子が、記紀双方に所伝の載る伝承的存在の雄略や磐姫と異なつて、斉明紀に謀反前後の記事がわずかに見えるだけの人物であり、その人間像に積極的な理由が見出し難いためである。皇子の自傷歌が挽歌冒頭に置かれた意味について明言されたのは桜井満氏である。氏は、自傷歌二首を皇子の事件と重ねて考察し、それが挽歌冒頭に据えられた理由を「悲劇の皇子の慰霊・鎮魂」のためと述べられた。確かに、有間皇子自傷歌を挽歌冒頭に置いたことに、悲劇の皇子への鎮魂の意味が込めら

れていたことは認められよう。しかし、巻の冒頭歌に規範としての意味が託されていたこと、及び、皇子の自傷歌が説明的な内容の左注を含む歌群として存在することからは、これらが単に皇子への鎮魂だけではなく、部立て冒頭歌としての積極的な意味を持つていたように感じられてくる。

そこで、有間皇子自傷歌が挽歌冒頭に置かれたことの意味は、歌の背後に皇子の事件を想定しつつも、部立て冒頭歌の機能論として考察されていった。それが、古橋信孝氏、辰巳正明氏による挽歌論である。古橋氏は、雑歌・相聞・挽歌の各冒頭歌を比較し、雑歌・相聞に比べ挽歌が二世紀遅れていることを指摘された。また、挽歌冒頭の有間皇子自傷歌が羈旅歌の形をとることから、「この二首は有間皇子の悲劇的な死の物語によって挽歌にされ」たと導き出した上で、

旅の歌が挽歌にされた。ということとは、それ以前に挽歌はなかったということになる。しかし、死の歌はなかったはずはない。ここから導けるのは、挽歌は特殊な死、異常死の歌だったということである。

と、述べられた。ここで古橋氏が述べる異常死とは刑死・自殺・事故死・早死など人間の寿命を全うしない死であり、古橋説によれば、有間皇子自傷歌が挽歌冒頭に置かれたことで挽歌が異常死の歌であることが示されたということに

なる。しかし、挽歌は果たしてそのように単純に捉えられるのであろうか。挽歌が「異常死への鎮魂」として始まったのならば、巻二挽歌の死者は異常死した者達となるはずである。しかし、巻二挽歌の死者の中で、古橋説の異常死に該当する死者は、厳密には、有間皇子(刑死)、十市皇女(急死)、大津皇子(刑死)、草壁皇子(早死)だけであろう。ただし、天智天皇については、陵墓の巨大さなどから古橋氏が推測されたように、遺言が守られなかった為に崇りが畏れられた可能性があり、例外的に異常死の範疇に入れても良いと思われる。しかし、それ以外の死者達(天武天皇・明日香皇女など)については、異常死とは認められない。従って、有間皇子自傷歌についても、他の解釈が必要となってくるだろう。

一方、辰巳氏は中国古挽歌(特に薙露・蒿里)から、その本質を人が無常な存在である事を語るものと導き出された。そして、『万葉集』が中国古挽歌を参考にして「挽歌とは人生の無常を嘆くことだ」という理解に至った為に「挽歌」を部立として選択することとなり、その「挽歌の一つの理想的な姿を説明するために」有間皇子自傷歌二首が「理想的なモデル」として選び取られたと考察された。また、二首が挽歌としては異例の生者の歌であることに關しては、『万葉集』が世間に伝えられた皇子の事件をふま

えることで「死者よりもより強烈に人の命の無常を描こうとした」と推定されている。⑨ 大多数の日本人にとつては未知の漢語であった「挽歌」を説明する為には有間皇子自傷歌が冒頭に置かれたという辰巳氏の見方は、憶良歌の後に記された左注の在り方に鑑みても、正しいものであろう。しかし、ここで注意しておきたいのは、有間皇子自傷歌が二首単独ではなく後に続く関係歌群と共に挽歌冒頭に位置しているということである。そのあり方を重視すれば、『万葉集』巻二の編者は、自傷歌二首だけではなく有間皇子自傷歌群全体を用いて何かを説明しようとしていたと考えるべきであろう。

有間皇子自傷歌について、この点を早くから指摘されていたのは伊藤高雄氏である。伊藤氏は、有間皇子像の享受の歴史に着目し、有間皇子自傷歌群が挽歌冒頭に置かれた意味の考察を試みられた。氏はまず、関係歌群から大宝元年の行幸を有間皇子伝承の「動態的な場」として把握され、『続日本紀』などの文献から、この時点で有間皇子が「〈王権〉」皇統の存在を根底からつき崩しかねない〈怨〉の象徴」であったと推定された。また氏は、憶良歌の後に置かれた左注を「これらが柩を挽く時の歌ではないが、歌意からは柩を挽く歌とみるべきだということ、すなわち葬歌としての意味で巻二挽歌部の冒頭にのせたということを

主張したものの」と解釈され、自傷歌群を冒頭に置いた編者の意図を「巻二挽歌部のなかで、一四一〜一四五番歌を真正銘の挽歌」葬歌として位置づける営み」と述べられた。そして、これらが実質的に「〈伝承〉」の動態として〈怨〉と〈王権〉皇統との相剋関係を内在する、闇の世界への鎮魂歌」として機能していると説かれている。皇位継承の政争に敗れ死を迎えた有間皇子を、皇統に禍をもたらす〈怨〉の象徴とする氏の見解は、首肯されるべきものである。また、氏の論は、自傷歌群全体から意味を見出そうとした点でも評価されるべきであるが、歌群の持つ意味については編者の記した左注を以て説明するにとどまる。確かに左注は、巻二編者の意図を示す記述として重視すべきものである。しかし、左注だけでなく、歌群の構成からも読み取れてくるものがあるのではないだろうか。そこで改めて、左注を含めた歌群の構成が何を語っているのかという視点から、有間皇子自傷歌群が挽歌冒頭に置かれた意味を考察していくことにしたい。

三 自傷歌の表現と挽歌

有間皇子自傷歌群の構成を明確に把握するために、まず、自傷歌二首の表現をおさえることからはじめたい。自傷歌二首で、従来特に議論の対象とされてきたのは、この二首

に悲劇性を見るか否かという問題についてである。これは、二首の表現が挽歌らしからぬ印象を我々に抱かせることに因する点が多いだろう。悲劇性を見る説は、この二首を皇子の事件と重ねて享受するものであり、契沖『万葉代匠記』以来、田辺幸雄氏¹¹⁾、北住敏夫氏¹²⁾、中西進氏¹³⁾、稻岡耕二氏¹⁴⁾、阪下圭八氏¹⁵⁾などの多くの研究者が、この立場から説を提出された。そして、これらの悲劇性を見る説は、「呪力を信じつつ松の枝を結ぶ。その上で『真幸くあらば』と

歌わざるを得ない所に、皇子の心の亀裂があり悲劇がある。単に湯治や遊山の旅で歌ったにしては不幸の影が濃すぎるだろう」という稲岡氏の説に代表されるように、一四一番歌の「真幸くあらば また還り見む」に悲劇性が見られることを論拠とする。一方、この二首を題詞や皇子の事件から切り離し単独でながめた時、そこに皇子固有の心情が表されていないとして、この二首を本来皇子とは無関係な歌が仮託伝承されたものとする説が折口信夫氏によって呈示された¹⁶⁾。この説は歌語り論とも関係して、山本健吉氏¹⁷⁾、伊藤博氏¹⁸⁾、露木悟義氏¹⁹⁾、渡辺護氏²⁰⁾、福沢健氏²¹⁾、長岡立子氏²²⁾など多くの研究者によって受け継がれている。福沢氏は緻密な用例検証から、「ま幸くあらば」から皇子の固有な体験を読み取ることが不可能とされ、また、「また還り見む」を『土地ぼめ』の類型表現」とされた上で、「歌の内容が

ら謀反に失敗して護送される有間皇子の固有の心情は窺いにく」いとして、自傷歌は「岩代での羈旅歌を仮託・転用する形で」成立したと考察された。また、長岡氏は集中の用例から「幸くあらば」『真幸くあらば』は、決して『幸く』あることが絶望な折の表現ではないことは明らか」と述べ、自傷歌は「不安な旅を続ける旅人」の歌として、一向にさしつかえない表現であり、類型」であると結論づけられている。

以上、悲劇性を見る説と見ない説の論拠を見比べて分かれるのは、この二首の解釈に一四一番歌の「真幸くあらば また還り見む」の解釈が大いに関わっているという事である。この二句を皇子の悲劇の声と見れば二首は皇子の悲劇を表した歌となり、旅人が道中の安全を祈る類型表現と見れば二首は一般的な旅人の歌となるのである。そこで、この「真幸くあらば また還り見む」という表現について、『万葉集』の用例を見ていきたい。

「また還り見む」という表現は集中に八例あるが、そのうち次の三例、

見れど飽かぬ吉野の河の常滑の絶ゆることなくまた還り見む
り見む
(一・三七)

み吉野の秋津の川の万代に絶ゆることなくまた還り見む

(六・九一一)

白崎は幸く在り待て大船に真楫繁實きまたかへり見む
(9・一六六八)

が、行幸従駕歌で用いられていることから、福沢氏の述べ
る通り「土地ほめ」の類型表現」と思われる。一方、「真
幸くあらば また還り見む」と同様、「幸く」あることの
仮定表現に「見る」又はそれに類似した語の推量形が続く
表現は、次の五例である。

①わが命し真幸くあらばまた見む志賀の大津に寄する
白波 (3・二八八)

②大君の 命畏み 見れど飽かぬ 奈良山越えて 真木
積む 泉の川の 速き瀬を 竿さし渡り ちはやぶる
宇治の渡の 滝つ瀬を 見つつ渡りて 近江道の 相
坂山に 手向けして わが越え行けば 楽浪の 志賀
の韓崎 幸くあらば また還り見む 道の隈 八十隈
毎に 嘆きつつ わが過ぎ行けば いや遠に 里離り
来ぬ いや高に 山も越え来ぬ 剣刀 鞆ゆ抜き出で
て 伊香胡山 如何にかわが為む 行方知らずて
(13・三二四〇)

③天地を嘆き乞ひ禱み幸くあらばまた還り見む志賀の韓崎
(13・三二四一)

④春さればまづ三枝の幸くあらば後にも逢はむな恋ひそ
吾妹 (10・一八九五)

⑤葦原の 瑞穂の国は 神ながら 言幸せぬ国 然れど
も 言幸ぞわがする 言幸く 真幸く坐せと 恙なく
幸く坐さば 荒磯波 ありても見むと 百重波 千重
波しきに 言幸すわれは 言幸すわれは
(13・三二五三)

用例①は、その題詞に「穂積朝臣老の歌」とある。この穂
積朝臣老は、『続日本紀』養老六年の條に天皇の乗物を指
弾した罪によつて佐渡に配流されたことが記されている。
従つて①は、その背後に配流事件を想定すれば老の嘆きの
歌となり、想定しなければ単なる従駕土地ほめの歌と見る
ことが出来るという、一四一番歌と同じ在り方で存在する。
そして、この老の佐渡配流は、①だけでなく次の②・③に
も関わってくる。この②・③は、長歌とその反歌であるが、
③の後には「右は二首。ただ、この短歌は、或る書に云は
く『穂積朝臣老の佐渡に配さえし時に作れる歌』といへ
り」という左注が記されている。従つて、この②・③も、
一般的な旅人が旅の不安を詠んだ歌であるとも、異伝にあ
る通り老が配流の嘆きを述べた歌であるとも解釈すること
が可能である。次の④は「春相聞」に含まれる歌であるが、
この歌の「幸くあらば」に関して、長岡立子氏は、
この一首、別れる妻に「な恋ひそ」となぐさめかけ
る歌である以上、「幸くあらば後にも逢はむ」は再び

の来訪を前提にした表現とみざるをえない。「幸くあらば」は「幸く」あることを前提にした仮定表現であったとみることができよう。少なくとも、この一首に絶望感をよみとることなどはほしめない。

と考察されている²³。従うべきであろう。また、次の⑤は、本来、遣唐使餞別歌であったと考えられている歌である。福沢氏はこの歌を例に挙げて、この「幸く坐さば」が不吉な表現であったならば遣唐使を送り出す言挙げの歌に用いられる筈が無いことを指摘し、「幸く」あることの仮定表現には特別な意味がないと考察されている²⁴。

以上の五例のうち、④・⑤の二例については、確かに長岡・福沢両氏の見解通り一般的な予祝表現と解してよいだろう。しかし、残りの三例については老の佐渡配流と切り離せない状況にあるため、老固有の悲劇性を含んだ表現とも解釈できる。そこで、この配流伝承に關係する三例の表現をもう少し詳しく見てみると、左注に配流との関連が記された②・③では、仮定表現の前に「相坂山に 手向けして」「天地を嘆き乞いのみ」という絶対的な存在（＝相坂山の神／天地の神）への祈りの習俗が詠み込まれていることに気が付く。従って、この①～③の例は、次のように考へることができる。本来、祈りは信頼すべき神への働きかけであるため、人はそれを行うことで「また還り見む」の

成就を確信できたはずである。しかし、②・③のように、祈りの習俗を述べた後に「幸くあらば」という仮定表現が述べられると、祈りを信頼しきれない人物の固有の心情が浮かび、そこに悲劇性を見て取る余地が生まれてくると思われる。だからこそ、この②・③の例は老の配流伝承を引きつけることとなり、それにつられる形で、③と類似した句を持つ①も配流事件を重ねて享受してしまうことになる。このような視点から有間皇子の一四一番歌を見ると、ここにも「譬代の浜松が枝を引き結び」という、神への祈りの習俗が詠み込まれている。従って、一四一番歌で問題になるのは「真幸くあらば また還り見む」の二句ではなく、《祈りの習俗（＝結び松）への信頼＋「幸く」あることへの仮定表現＋また還り見む》という、固有な悲劇性を孕む可能性を持った不安定な表現形態であると考えられる。

次に、自傷歌二首のうちのもう一方、一四二番歌に注目してみたい。一四二番歌は、「家」と「旅」の対比から成り立っている。「家」での日常と比較して「旅」の不自由さを歌うという発想は羈旅歌に多く見られ、家人が「斎ふ」ことが旅人の身の安全を保障するという呪術的共感關係から生じたものであることが、神野志隆光氏によって指摘されている²⁵。一四二番歌も、この羈旅歌の類型的発想に沿って作られたものと思われる。しかし、一四二番歌は

「椎の葉に盛る」の解釈に問題を持つ。椎の葉は飯を盛るには小さすぎる為に、椎の葉に盛られた飯が皇子の食事を指すと素直に解釈することができないのである。そこで、この問題を解決する方法として、高崎正秀氏がこれを「紀州磐代の道祖神の神前に供へ」た神饌とする説を呈示された。²⁶これに対し、稲岡耕二氏は一四二番歌が持つ「家」と「旅」の対比という羈旅歌の構造に着目され、旅に於ける神饌から家に於ける神饌を思い起こすという神饌説の発想の形式を「それでは余りにも抽象化し、ふやけた発想となつてしまわないか」と批判された。²⁷つまり、旅先での不如意を強調するために土地特定の習俗である神饌と家での神饌とを対比するということは、旅行く者の発想としてあり得ないというのが氏の論点である。氏の述べる通り、一四二番歌は明らかに「家」と「旅」の対比という羈旅歌の構造を持ち、この構造は旅の不自由さへの嘆きを必然的に持つ。従つて、神への手向けの歌にこの構造を用いた場合、構造が持つ嘆きの要素が手向けを表す部分に表れてしまうことになる。一首を神饌説で解釈するならば、何故神への手向けの歌にこの対比構造を用いる必要があつたのかが説明されなければならぬだろう。また、確かに食事を「椎の葉に盛る」行為は通常あり得ないことかもしれないが、その形状によつては（例えば握り飯などであれば）可能な

ことと思われる。やはり一四二番歌は、安楽な「家」を離れ、飯を椎の葉に盛るという旅の不自由さに直面した者の嘆きを詠んだ歌であると考えられる。一四二番歌は、他にも「有間皇子の自ら傷みて松が枝を結べる歌」という題詞が歌の内容に関わらないという問題を持つが、一首をこのように解釈すれば、少なくとも「自傷」という題詞の表現と歌に表れた主体の心情とは重なつてくるだろう。

自傷歌二首のうち、一四一番歌は結び松による祈りが主題となつているが、そこには《祈りへの信頼の不安定さ》が表れていた。その次に置かれた一四二番歌には、「飯」という特殊な題材を通して不自由な旅にある身への嘆きが詠まれている。つまり、この自傷歌二首には、命の無事を願いながらも呪術を信じきれず、旅での食事から家を思い出すという個の一回的な心情が表れていると考えられる。また、二首の表現方法は斉明朝に遡り得る古代性を持つことが、近年、岩下武彦氏によつて検証されている。²⁸如上のことからも、二首は後代の羈旅歌が仮託転用されたものというよりも、むしろ命の危機に直面した皇子固有の心情が反映された、皇子自作の歌と考えられるのである。

四 有間皇子自傷歌群の意味

これまでの考察を視野に入れて、有間皇子自傷歌群の構

造を考察していきたい。

有間皇子が残した自傷歌二首は、二首組となった状態で悲劇伝承と共に伝わっていたと思われる。そして、この悲劇伝承と歌は世間に広く知られていた為に、後に皇子の自傷歌に関わる歌が詠まれる事となった（関係歌群）。これらの追悼歌の表現を見ると、「また見けむかも」「見らめども」「後見むと…また見けむかも」というように「見る」という語に固執して詠まれていることが分かる。従って、自傷歌二首のうち、一四一番歌の「また還り見む」という表現が人々に強く意識されていた事が読み取れてくる。それは、特に一四一番歌が《祈りの習俗（＝結び松）への信頼＋「幸く」あることへの仮定表現＋また還り見む》という表現構造をとる為に、祈りの習俗に信頼しきれない皇子の不安定な心情や悲劇性を人々に感じさせたためであろう。この「結び松」を「また還り見む」という皇子の言葉は、書紀の記述によれば皇子が警代を行きと帰り二度通っているため、実際には果たされていることになる。しかし、関係歌群中の意吉麻呂歌・人麻呂歌集歌が「また見けむかも」と皇子が「結び松」を還り見たことへの疑問表現をとることや、憶良歌が「天翔」る魂となつて皇子が「結び松」を見ていると表現することからは、関係歌群は皇子が「結び松」を「還り見」できなかつた、すなわち死を迎え

たと捉えた上に成り立つたものと見ることが出来る。つまり、当時一四一番歌は、皇子の「また還り見む」という願いは果たされなかつたという前提で享受されていたと考えられる。そして、そのように捉えた場合、「また還り見む」は死者有間皇子が生前に語つた意志と受け取る事が可能である。それが果たされないままに皇子が死を迎えたと考える当時の人々の目から見れば、それは死者の心残りの表現として受け取られるものであつただろう。そこで、願いを込めて松を結びながらも「また還り見む」という意志を果たすことが出来なかつた皇子の悔しさや心残りを鎮めるために、関係歌群が詠まれたと推測できる。

関係歌群のうち、意吉麻呂・人麻呂歌集歌は共に、皇子が松を「また見けむかも」と歌う。この「見けむかも」は、人麻呂の石見相聞歌の反歌（或本歌）にも用いられている。石見なる高角山の木の間ゆもわが袖振るを妹見けむかも

（2・一三四）

旅行く男にとつて妹との共感是最も大切なものであるが故に、男は妹に向かつて袖振りをし、それを妹が「見る」という状況が求められたが、石見にいる妹が里を遠く離れた男の振る袖を見ることは不可能である。そこで男は、妹が男の袖振りを見たという状況を想像することで、幻想の中で妹との魂の共感を実現しようとしている。しかし、男は

現実にはこれが不可能であることを知るために、自らの幻想への疑念を持たざるを得ない。これが「見けむかも」の意味であると思われる。これと同様に、意吉麻呂や人麻呂歌集歌の表現も、皇子が結び松を還り見たという実際には起り得なかつた事を、疑念を持ちながらも推量し、幻想の中で皇子が松を還り見た状況を作り上げていると考えられる。一方、憶良歌は、皇子が死後に魂となつて松を見ていることを推量している。従つて、これら三首は皇子が「結び松」を還り見たという状況を歌に於いて作り上げ、皇子の「また還り見む」という意志を果たそうとしていないと考えられる。これらの関係歌群が一四二番歌を踏まえていないのは、これらが一四一番歌に述べられた皇子の心残り「また還り見む」に鎮魂の必要性を感じて詠まれたためであろう。

関係歌群のうち、意吉麻呂歌・憶良歌の詠まれた場合は、大宝元年の紀伊行幸時とする説もあるが、中西進氏が述べる通り持統四年の紀伊行幸時と考えられる。この同じ持統四年の紀伊行幸時に詠まれた歌が、『万葉集』巻一に収載されている。

白波の浜松が枝の手向草幾代までにか年の経ぬらむ

(1・三四)

この一首は、「浜松が枝」という有間皇子の言葉をそのま

ま引用しており、また、おそらく「結び松」のことを指すと思われる「手向草」を詠み込んでいる。従つて、一首は明らかに有間皇子を意識して詠まれたものと推測できる。

このことから、紀伊行幸時に持統一行が磐代を通過するにあたり、まず想起されたのは有間皇子の事件だったのであり、彼らが磐代を無事に通過するために有間皇子の鎮魂が必要不可欠だつたことがうかがえる。また、想像をたくましくすれば、持統が即位した年である持統四年時に紀伊行幸が突如として行われていること自体、その目的は悲劇の皇子の鎮魂にあつたとも考えられる。紀伊行幸は大宝元年にも行われ、そこで一四六番歌が詠まれている。このように度重なる鎮魂の必要性があつたのは、三四番歌や関係歌群の表現から見て、一四一番歌に死者の心残りを表す言葉「また還り見む」が述べられていたためであろう。これが、持統朝前後の有間皇子自傷歌享受の実態であつたと考えられる。

そして、その次の段階として『万葉集』への収載がある。まず、『万葉集』巻二編者は、挽歌の冒頭を飾る歌として、世間に広く知られていた有間皇子自傷歌二首を選んだ。しかし、享受者がこの自傷歌二首を死に関わる歌と捉え得るのは、皇子のその後の悲劇的結末を知る目で表現を捉えるからである。そこで、巻二編者は「自傷」という題詞のも

とにこの二首を置き、享受の前提として皇子の事件があることを示したと考えられる。

自傷歌二首のうち、人々に強く意識されていたのは一四一番歌の方であった。それは、一四一番歌の「また還り見む」により強い悲劇性が感じられたためである。それならば、編者もまた他の人々と同様、一四一番歌の心残りの表現に強い悲劇性を感じ取ったはずである。二首をくくる題詞は「有間皇子の自ら傷みて松が枝を結べる歌二首」であり、「松が枝を結べる」という部分は一四一番歌のみを指し示す。従って、編者が二首を「松が枝を結べる歌二首」と記すことによつて、一四一番歌の方に重点が置かれることとなる。編者は一四一番歌に偏つた題詞を記すことで、一四一番歌の存在を際立たせようとしたのではなかったか。編者は、題詞で一四一番歌に重点を置き、自傷歌二首の後に一四一番歌に対して詠まれた関係歌群を配列することで、自傷歌群を皇子と「結び松」の歌群として構成したかったのだと考えられるのである。

題詞が規定した前提に立つて歌を見た時に、一四一番歌には人間がどんなに祈りを捧げた（「結び松」としても必ずおとずれてしまう非業の死が示され、生を望んでいた死者の強い心残り「また還り見む」が述べられている。そして、意吉麻呂・憶良の追悼歌が次に置かれることで、死者

に思いを馳せ、その死を嘆く残された人々の存在が示されると同時に、その人々によつて「また見けむかも」「見らめども」というように、死者の強い心残りを鎮めようとする歌が歌われる事が示される。しかし通常、死者の思いは死者自身によつて実際に語られることは無く、残された生者が想像するしか方法が無い。生者が死者の思いを想像し、その思いを鎮めるべく詠まれるのが現実の挽歌の姿なのである。一方、有間皇子自傷歌には「また還り見む」という形で、死者の思いが死者によつて実際に語られている。従つて、自傷歌二首の次に追悼歌が配列されることによつて、《一人の人間の死があり、死者によつて思い（心残り）が語られ、その思い（心残り）を鎮める為に残された生者が歌を詠む》という過程が明示されることになる。そして、それが日本に於ける挽歌の形態であると巻二編者が理解していた為に、編者は挽歌の概念を説明する意図をもつて、自傷歌と後人の歌から成る異例の歌群を挽歌冒頭に据えたと考えられるのである。この、歌群を以て挽歌を説明するという編者の姿勢は、巻二編纂当初挽歌巻末を締めくくっていたとされる人麻呂の自傷歌群のあり方からも見て取ることができらるだろう。

万葉挽歌の中で、生者の詠んだ歌（臨死歌）は極めて特殊であり、有間皇子自傷歌の他には人麻呂の自傷歌（2・

二二三)と大津皇子の歌(3・四一六)が見られるにすぎない。そのうちの二つを巻二挽歌が含み、且つそれが最初と最後に歌群の形で置かれているということは、編者が「自傷」という形態を必要としていたことを示している。従って、編者が有間皇子自傷歌二首を挽歌冒頭歌に選んだのは、自傷歌二首が皇子の事件と共に世間に広く知られていたからというのも理由としてあるだろうが、何より自傷歌に死者の思いが述べられていることが重要であったのだろう。

以上のように自傷歌群の意味を考えたとき、編者が最後に記した左注、

右の件の歌どもは、柩を挽く時作る所にあらずといへども、歌の意を准擬ふ。故以に挽歌の類に載す。

は、「挽歌」という語の輸入元である中国に於ける挽歌本来の形態は「柩を挽く時に作」られ歌われるものであったが、そこに表された心情(「歌の意」)は、日本に伝わる死者を悼む歌と同じである為に、これらの日本の歌に「挽歌」と名付けたという説明であると解釈できる。つまり、巻二編者は、有間皇子自傷歌群を挽歌冒頭に置くことで、日本に於ける挽歌の形態を歌によって説明し、その後「挽歌」という語を紹介したと考えられるのである。この時点で、有間皇子自傷歌群は、巻二の編者が作った五首セ

ットの挽歌として存在したものと推測できる。左注が「右の件の歌どもは」と五首を一くくりに見ていることが、その傍証となるだろう。そして、その後、人麻呂歌集の一四六番歌が有間皇子関係歌ということで追補され、有間皇子自傷歌群は六首セットの挽歌となった。この一四六番歌が、追補の形を明らかにして記されなければならなかったことは、それだけ、一四一番歌から一四五番歌の後の左注までが意味のある構成としてまとまっていた事を示しているのではないだろうか。

五 結

有間皇子自傷歌群は一まとまりの挽歌であった。それは自傷歌によって死者の思いが語られているという特殊なケースであるが故に、《一人の人間の死があり、死者によって思い(心残り)が語られ、そして、その思い(心残り)を鎮める為に残された生者が歌を詠む》という日本に於ける挽歌の形態を明示することが可能となったのである。従って、有間皇子自傷歌群は左注まで含めて、巻二編者によってなされた挽歌の説明であり、挽歌観の表明であったと見ることが出来る。また、有間皇子は悲劇の死を迎えた皇子であるが故に、当時の人々をして慰撫・鎮魂を必要と思わしめる死者であった。それを、編者は十分把握しており、

この皇子を中心とした歌群を、挽歌の冒頭に据えたのであろう。有間皇子自傷歌群は、まだ日本に十分知られていなかった概念である「挽歌」を説明しようとする『万葉集』巻二編者によって周到に用意・構成されたものだったのである。

挽歌は、『万葉集』に収載された形でしか存在しない。それは、『万葉集』巻二編者が、それまで詠み継がれてきた死者を悼む歌々に「挽歌」という名称を与えたことに始まる。従って、編者の意識は、『万葉集』巻二編纂当時の人々から見て「挽歌」とは何であったのかという事を探る上で、重要な手がかりとなってくるであろう。

注

- (1) 万葉集本文は、中西進校注『万葉集 全訳注原文付』（講談社文庫）に拠った。
- (2) 折口信夫氏「萬葉集講義」（『短歌講座』第五卷 改造社 昭和7年2月、『折口信夫全集』第九卷所収）、「上代貴族生活の展開―萬葉びとの生活―」（『歴史教育』第八卷七号 昭和8年10月、『折口信夫全集』第九卷所収）など。
- (3) 高崎正秀氏「万葉集部立の論」（『高崎正秀著作集』第三卷所収）
- (4) 伊藤博氏「巻一雄略御製の場合」（『舒明朝以前の万葉歌の性格』（『萬葉集の構造と成立上・古代和歌研究』）塙書房 昭和49年9月）
- (5) 三谷栄一氏「磐姫皇后と雄略天皇―巻一・巻二の巻頭歌の位相―」（『萬葉集講座』第五卷 有精堂 昭和48年2月）
- (6) 桜井満氏「巻頭歌の意義―儀礼と神話の間―」（『万葉集研究』第十集 塙書房 昭和56年11月）
- (7) 桜井満氏「有間皇子の『結び松』」（『万葉集の風土』講談社現代新書 昭和52年12月）
- (8) 古橋信孝氏「挽歌の成立」（『日本文学』四一巻五号 平成4年5月）、「挽歌の成立」（『古代都市の文芸生活』大修館書店 平成6年4月）、「挽歌」（『万葉集―歌のはじまり―ちくま新書 平成6年9月）
本文引用は、『万葉集―歌のはじまり』（p.145）より。
- (9) 辰巳正明氏「挽歌論」（『記紀万葉の新研究』桜楓社 平成4年12月）
- (10) 伊藤高雄氏「有間皇子異聞―伝承の基層にあるもの―」（『野州国文学』四九号 平成4年3月）
- (11) 田辺幸雄氏「有間皇子」（『初期万葉の世界』塙書房 昭和32年5月）
- (12) 北住敏夫氏「有間皇子」（『国文学』三巻一号 昭和33

年1月)

- (13) 中西進氏「真幸くあらば」(『万葉史の研究』桜楓社昭和43年7月)
- (14) 稲岡耕二氏「有間皇子」(『萬葉集講座』第五卷 有精堂 昭和48年2月)
- (15) 阪下圭八氏「有間皇子—真幸くあらばまたかへり見む」(『初期万葉』平凡社 昭和53年5月)
- (16) 折口信夫氏「萬葉集短歌論講 卷第一」(『アララギ』大正9年12月、『折口信夫全集』第二九卷所収)
- (17) 山本健吉氏『万葉百歌』(中央公論社 昭和38年8月)
- (18) 伊藤博氏「萬葉集の構造と成立上・古代和歌研究I」(昭和49年9月)
- (19) 露木悟義氏「有間皇子の悲劇」(『古代史を彩る万葉の人々』笠間書院 昭和50年6月)
- (20) 渡辺護氏「有間皇子自傷歌をめぐって」(『万葉集を学ぶ』第二集 有斐閣 昭和52年12月)
- (21) 福沢健氏「有間皇子自傷歌の形成」(『上代文学』五四号 昭和60年4月)
- (22) 長岡立子氏「有間皇子自傷歌論—類型と文学意識—」(『米沢国語国文』一一二号 昭和60年9月)
- (23) 注(22) 前掲論文
- (24) 注(21) 前掲論文
- (25) 神野志隆光氏「行路死人歌の周辺」(『論集上代文学』第四冊 笠間書院 昭和48年12月)
- (26) 高崎正秀氏「萬葉集の謎を解く」(『文芸春秋』昭和31年5月)
- (27) 注(14) 前掲論文
- (28) 岩下武彦氏「有間皇子歌私考」(『美夫君志』四三号 平成3年10月)
- (29) 中西進氏『山上憶良』(河出書房新社 昭和48年6月)
- (30) 伊藤博氏「女帝と歌集」(『萬葉集の構造と成立下・古代和歌研究II』昭和49年11月)
- (31) ここでは、『万葉集』巻二挽歌に含まれる歌々を指す。倭太后や柿本人麻呂等が「挽歌」という意識を持って作歌したのではなく、彼らが近親の人の死に臨んで詠んだ歌を巻二編者が「挽歌」と分類したのである。
- (32) 「柩を挽く時作る所」を山田孝雄『万葉集講義』は「挽歌」の語を繰り返さないための避本法としているが、この説には従わない。文字通りにとつて、中国での挽歌の形態を表しているとする。
- (附記) 本稿は、平成十年十二月十二日の上代文学会例会における口頭発表をもとに補筆したものである。席上、貴重なご意見を賜った諸先生方に、厚く御礼申し上げます。